

石松は地元の嫌われ者

富岡での石松評価は最悪です。やくざ者として村人から嫌われたため、葬式も普通に出させてもらえず、戒名もなく、石塔も建てられませんでした。これまでに、森の石松でまちおこしを考えたこともあったようですが、根強い反対と子孫や関係者への配慮もあって、実現していません。石松にかかわる富岡での伝承等は次の通りです。真偽が定かでないものもありますが、後世のため記録しておきます。

- ① 「石松のようなやくざになるな。」と厳しく教えられた。

(郷土 97 号：石松と血縁関係にある故峯田通俊氏の記録)

- ② 家族や親戚が肩身の狭い思いをしており、石松の話はしないようになった。(伊田良種氏)

- ③ 石松が隻眼というのは作り話で、体格のよい大男だった。映画「エノケンの森の石松」がヒットし、演じた榎本健一が小柄だったため、石松のイメージが変わったのではないか。

(洞雲寺住職 鈴木一基氏の話)

- ④ 石松が代参に行った帰り、生家に 2、3 日滞在し、お札や土産を近所に配った。「うちにも石松があいさつに来て、数人の子分たちが取り巻いて、それは怖かった。」と聞いた。

(石松の生家の隣家に住む大叔母から故菅沼光男氏が聞いた話)

- ⑤ 弟の佐与吉が石松の首だけを持ち帰り、洞雲寺に埋葬しようとしたが村人に大反対された。人並みの葬儀ができず、首を入れたかめだけを埋め、その上に自然石を置いた。1979年(昭54)頃、墓の修復をすると、ちょうど首が入るほどの大きさのかめが出土した。水がたまっていて、石屋はそのまま埋め戻した。(洞雲寺住職 鈴木一基氏の話)

- ⑥ 富岡では、ぐずる子供に「ばくち打ちが高張りちょうちんを持ってさらいに来るぞ」と言い聞かせたという。都鳥一家が、血相を変えて石松の首をさがしに来た恐怖の記憶が脳裏に染みこんだのだろう。(中日新聞：古里点描 1999. 3. 14)

- ⑦ 佐与吉はかったい(ハンセン病)だったという。石松は佐与吉を連れて街道筋(賀茂方面)へ出て、博打打ちの三下を斬り殺し、腹を断ち割り、薬効とされた生き肝を佐与吉に食べさせた。野ざらしになっていた死体を地元の村人が葬った。

- ⑧ 山本家の三度目の火災は、石松が火をつけたのではないかといわれている。(年齢的にどうかと思われるが) (⑦, ⑧は鈴木, 伊田氏等が伝え聞いた話)

- ⑨ 佐与吉の長男「欽吉」は大酒飲みで、けんか吉と呼ばれた。先代の大僧正(明治36年生)が9歳の時、欽吉が「戒名が低すぎる」とどなり込み、先々代を脅した。後日、禅定門から格上げ、佐与吉の戒名は「直証正念庵主」となった。(洞雲寺住職：鈴木一基氏)